

---

# 文学における種々のテロル

ジャン・ポーランとシャルル・モーラス

---

YASUHARA Shinichiro

安原 伸一郎

## 0. はじめに

シャルル・モーラスとジャン・ポーラン。一方は王党派の領袖として現代では忘れ去られ、他方は第二次大戦前後のフランス文壇の黒幕として研究され、今や全集が刊行されつつある人物。かたや、ドレフュス事件で反ドレフュス派の論客として華々しく登場し、国粋主義的組織にすぎなかったアクション・フランセーズを瞬間に王党派の牙城とし、多くの作家や青年たちを惹きつけ、ヴィシー時代には「フランスのみ、ただフランスのみ」をスローガンとし、フランスの体面を慮るあまり、反ドイツの姿勢から逆説的にもヴィシー政権のイデオログとなり、戦後に国家反逆の罪で有罪判決を受けた際には「これはドレフュスの陰謀だ」と叫んだ人物。他方、第一次大戦での従軍経験を描いた物語で作家としてデビューし、ジャック・リヴィエール急逝の後ピンチヒッターのようにしてNRFの編集長となり、キュビズムを熱烈に擁護し、第二次大戦を面従腹背の姿勢で生き延び、戦後に到るまで、レイモン・クノーやモーリス・ブランショら多彩な作家たちを発掘した編集者。言うなれば、第二次大戦中の恐怖政治を積極的に推進した文筆家と、文学における恐怖政治を論じていた批評家。

このように見るならば、まるで対照的な二人ではあるが、実のところ、とりわけ大戦期間において二人は交錯していた。どうやら、1868年生まれのモーラスを、1884年生まれのポーランはかなり読み込んでいたようなのだ。ポーランは、「私はつねにジャン・グラヴとシャルル・モーラスの考えに納得してきた」<sup>(1)</sup>と記している。だが、グラヴとモーラスだって？ 驚くべき組み合わせではある。グラヴと言えばアナキズムの著述家であり、モーラスとは言えば王党派の代表者である。この二人が並んでいることは、今日の日から見れば奇異の念も抱かせかねないが、それほどポーランとモーラスは遠からぬ地点に立っていたのである。

ここでは、19世紀末から世紀転換期にかけて雑誌『ラ・ヴォーグ』や『ルヴュ・ブランシュ』の編集を務めた文学・美術評論家でありアナキストでもあったフェリックス・フェネオンとポーランとの関係に対して、革命的サンディカリズム運動の思想家であり、20世紀の種々の政治思想に大きな影響を与えたジョルジュ・ソレルとモーラスとの関係を対置することで、ポーランとモーラスの関係と隔たりを眺めてみたい<sup>(2)</sup>。

(1) Jean Paulhan, *Braque le patron*, Gallimard, rééd. 1980, p. 11.

(2) ポーランは、ここに引いた彼自身の言葉とは裏腹に、「ジャン・グラヴもセバスチアン・フォルも、その論述は退屈だが、感じは良かった。純朴で、爆弾を仕掛けるには明らかに不向きだった。フェネオンとは言えば、人を笑わせ、驚かせ、好きがした」とも記しており (Jean Paulhan, *F.F. ou le critique*, Claire Paulhan, 1998, p. 44)、実のと

ころ、グラヴよりもフェネオンにかんして顕著に言及しているため、本論では、フェネオンとポーランの関係を扱うこととする。

## 1. ジャン・ポーランとフェリックス・フェネオン

ポーランは、1936年に「タルブの花あるいは文学における恐怖政治」と題された論文を発表し、それを発展させた同名の著作を1941年に刊行している。この二つの版の間の特筆すべき異同としては、第二次大戦中に刊行された単行本には、「わたしは大政治家たちが戦争のことを考えていながら平和を口にしたり、大量虐殺を考えながら秩序について語ったり、何かしら得体のしれぬことを考えながら高貴さとか献身とか騎士道精神などについて語るようなある世界のことは何もいうまい」<sup>(3)</sup>との文言がある点が挙げられよう。ポーランは明らかに、「文学における恐怖政治」に対していかに抵抗するかを論じながらも、ドイツによる占領やヴィシー政府の圧政に反対する立場から発言しているのである。

ポーランの述べる「文学における恐怖政治」とは、一市民の仕事よりもまずその人柄や思想が判断される恐怖政治として、作品よりもそれを書いた作家の重視、その人の抱く思想や精神の無垢さと純粋さの称揚を文学にもたらす、というものである。レトリックの花で飾り立てて考えを述べる者は、疑わしき者とされる。「恐怖政治は一般に観念のほうが言葉よりも価値があり、精神のほうが物質よりも価値があると認めるということ」であり、「言語は思考にとって本質的に危険なもの」<sup>(4)</sup>ということである。それは、文学に力を及ぼすとき、文学から常套句を排除しようとする思潮として現れるのだ、という。

ところで、この「恐怖政治」は、フランス史上の恐怖政治と軌を一にしている。ポーランは次のように述べている。

国家の歴史におけるあの推移変転の時期 [...] は、「恐怖政治」と称されるが、そのような時期においては、国家の統治にとって策略や方法などではなく、また科学や技術でさえなく一むしろ極度に純粋な魂と多くの人々に共通する新鮮な無垢感とが不意に必要なものとなってくるように思われる。そこから、市民自身のほうが彼らの職業よりもむしろ考慮されることになり、椅子は指物師のために、治療は医者のために忘れられるということになる<sup>(5)</sup>。

このように、ポーランの言う恐怖政治は、まずは歴史上の事件を指している。ここでポーランが注

---

(3) ジャン・ポーラン『タルブの花』野村英夫訳、書肆心水、2004年、p. 122.

(4) ジャン・ポーラン、同書、pp. 173-174.

(5) ジャン・ポーラン、同書、p. 156.

目するのは、反革命勢力を一掃しようとする恐怖政治下では、口にされる言葉よりもその裏に潜む考えが重視されるという、一つの原理的な変化である。それゆえ、「文学における恐怖政治」とは、フランス革命期および革命後に誕生したロマン主義において、独自でかけがえのない存在であるはずの自我やその思想を、手垢にまみれた表現、すなわち紋切り型によっては表現すまいという文学思潮を指している。こうして、まるで革命の純潔な大義を守るべくフランスから反革命派が肅清されるかのように、各人の思想の純潔さを守るべく文学から紋切り型が消されていくことになる。つまり、ポーランドにあっては、文学の紋切り型と政治上の王様が同じ位置に置かれているわけである。

そしてポーランドは、「文学における恐怖政治」を押し留めるには、「lieux communs（常套句）は、communs（共通のもの）ではない」がゆえに、「共通のものとする」<sup>(6)</sup> ことが必要なのだという。そもそも、文学から肅清されてきた常套句は、恐怖政治で考えられるように本当に常套句なのだろうか。文学における恐怖政治は、思想の無垢さを汚すとされる言語を透明にするどころか、思想を大切にしようとするあまり、かえって言葉を不透明にしていないだろうか。そう問うポーランドは、あらためて常套句に立ち戻る。常套句は、人を動かすほどの力をもち知性に裏打ちされていることもあれば、冗談や駄洒落のごとく馬鹿げて用いられていることもあり、けっして厳密には決定できない曖昧さをもっているのではないか。つまりそれは、恐怖政治家たちが考えるほど手垢にまみれた常套句なのではない。逆に、常套句を「共通のもの」とすることこそ、言葉と思考とのずれ、そしてそのずれの感覚から生じる言葉の力の神話を消し去るだろう。

このように考えるポーランドは、フランス革命についてもきわめて興味深い発言をしている。彼は、革命家たちがフランス革命を見誤ったとし、「1791年のフランス人たちはむしろ人を牢獄につなぐようになった」と考える。なるほど、ここにポーランドにおけるモーラスの影響を認めることができよう。文学における恐怖政治に対抗するに常套句の復権を唱えるかに見え、民衆の平準化をもたらしたフランス革命を批判しているからである。だがポーランドは、単純に常套句の復権を唱え、王党派を擁護し、民主主義を批判しているのではない。彼は次のように述べている。

[1791年のフランス人たちは] フランス人全員が爵位を授かるという決定を下さなかった。  
[...] けれども、91年のフランス人たちには長所もありました。彼らは、一人の人間——誰で

---

(6) ジャン・ポーランド、同書、p. 249. (強調ポーランド。  
訳文を変更している)

もいい人、どこにでもいる人——が、たとえ貧しかろうと、考慮に値するということを発見したからです<sup>(7)</sup>。

ポーランはこのように民主主義に賛意を示す。しかし、そうしながらも彼は、その実、きわめて両義的な態度を見せてもいる。彼は、どこにでもいる人にこそ重きが置かれるようになるという点で民主主義を評価しながらも、誰もが必ずしも十分には考慮されていないという点で民主主義に留保を示すのだ。すなわち、彼は代表制に疑義を差し挟むのである。彼は、次のように述べて、王をどこにでもいる人とするこゝで、純然たる王党派に対して距離を取るのと同じように、代表制に基盤を置く議会民主主義に対しても無条件に賛成するわけではない。

けれども民主主義は、弁護士や学者、「事情通」(フリー・メーソンやその他)の手に委ねられる時、[どこにでもいる人に対する]この信頼を裏切ってしまう。ところが、王様は逆に、その天分や(独裁者のように)、その世才や(議員のように)、その知性から(学者のように)選ばれるわけではありません。彼はまさに、どこにでもいる人なのです<sup>(8)</sup>。

王は人格や才覚ではなく籤のように偶然の結果である生まれによって定められると考えるモーラスの影響を多分に受けながらも、そうして血統を保つ王が唯一フランスを統合すべしと考えるモーラスとは異なって、ポーランは、常套句を文字どおり共通のものとするのと同じように、王が実は誰でもよいばかりか、王位は万人に共通のものとなりうるべきなのだ、と考える。

ポーランにとって「恐怖政治」は、文学においても歴史においてもまづもって抵抗すべきものとして現れる。だがその抵抗は、恐怖政治に取って代えられるような復古的な体制の思想をもって行なわれるのではなく、ローラン・ジュニーが「ここにあらためて見出されるポーランの政治と詩学は、一種独得な性質をもつシンボル——すなわち偶発的で意味を欠いてはいるが、状況次第ではあらゆる意味を喚起することができ、共有されているが、場合によっては追い払われ、状況を解きほぐすことができるものの、時には不発に終わる性質をもったシンボル——を表象の中心に据えるのである」<sup>(9)</sup>と述べているように、むしろ、王と常套句を、肉実の空虚なものとして万人のものたら

(7) Jean Paulhan, *Les incertitudes du langage*, Gallimard, coll. Idées, 1970, pp. 44-45.

(8) Lettre de Jean Paulhan à Marcel Jouhandeau de novembre 1940, in *Choix de Lettres*, tome II, Gallimard, 1992, Paris. ここに「フリー・メーソン」に対する批判が読まれるが、戦中のポーランの動きや、この手紙が反ユダヤ主義者で対独協力作家のジュアンドー宛であることを考慮するならば、この注記がどこまでポーランの本心だったか

は分からない。

(9) Laurent Jenny, *Je suis la révolution*, Belin, 2008, p. 153.

しめることによって行なわれるのである。

では、王の単独性を信じない王党派、代表制に疑義を差し挟む民主主義者、常套句が共通のものではないと主張する批評家という特異なポーランの思想の出発点は、いったいどこにあるのだろうか。

ポーランは、1945年に『フェリックス・フェネオンあるいは批評家』と題された熱烈な文章を發表している。フェネオンとは不思議な人物である。1861年に生まれ1944年に亡くなった彼は、戦争省に勤める傍ら、『リーヴル・ルヴュ』や『ルヴュ・ブランシュ』など種々の文芸雑誌の編集を行ない、美術批評家としてはスーラなど新印象派を、文芸評論家としてはマラルメをはじめとした象徴派をきわめて早い段階で擁護しながら、文筆家として『三行短信』などを著し、1894年には、国会議員の集まるレストラン・フォワイヨでの爆弾テロ事件などに関与したとして捜査を受けるアナキストでもあった。裁判では結局無罪となるが、当局はフェネオンが死去するまで容疑者と考えていたし、彼自身、たしかにアナキストだった。役人であり、批評家であり、作家であり、なおかつ定義からして代表制に真っ向から対立するアナキスト。

そのフェネオンについて、ポーランは次のように記している。

詩人でありボクサーでもあり、フェネオンの友人でもあったアルチュール・クラヴァンは、フェネオンに対しては、けっして「Cher Monsieur」とも「Cher Maître」とも言わず、単純に（そしてとても繊細な呼び方だが）「Cher homme」と呼んでいた。[...] 人間であって、批評家ではない。文人でもなく文学者でもない。専門家ではない人間。矛盾を抱えた人間。彼にあっては、これらさまざまな人間がいる<sup>(10)</sup>。

つまり、ポーランにとって、フェネオンとは、美術批評家にしても理論に基づくものではなく、文芸評論家としても誰も説得しようとはしない人物なのである。19世紀末に自由詩を求める運動と、アナキストの爆弾テロとが交わる点に立つフェネオンは、たとえばアナキズムの主張を、次のように皮肉とユーモアたっぷりに述べている。

「一人のブルジョワが警察署の前を通った。警官が彼をひっ捕らえ、手荒く署内に連行した。

---

(10) Jean Paulhan, *F.F. ou le critique*, op. cit., p. 81.

捕らえられてから4時間後、彼は黙って出て行くよう言われた。彼はアナキストに間違われたのである！ 愛らしくもある話だ。私たちとてお互い様である。私たちがあなた方の制服を着た一人が散歩するのを目にした最初の夜、さあ落ち着こうではないか、署の諸君、私たちはこの人をおまわりと間違えることにしよう！」<sup>(11)</sup>

この一見他愛のない話からは、フェネオンの伝記作者であるジョン・ハルプリンが「フェネオンにとってのアナキズムは、クロボトキンが想定しているのとは異なって、なにも、芸術や文学が「革命の道具」になることを求めるものではない。アナキズムを推し進めようとする者は、より効果的でもっと直接的な手段を使うことができるわけだし、他方で、芸術、新たな芸術(アール・ヌーヴォー)はそれ自体革命的なのだ」<sup>(12)</sup>と記しているように、フェネオンの姿勢は、言うなれば、文学的なアナキズムであるとも見えよう。

そして、「アナキストたちのテロには良かれ悪しかれ理由があるのだらうが、私は関知しない」<sup>(13)</sup>と述べるポーランは、個人の絶対的自由を主張し代議制を根本的に否定するというアナキズム一般の側面よりは、フェネオンのこのモラリストとしての面を強調し受け継ぐのである。すなわち、フェネオンは、ポーランから見て、政治だけでも美術だけでも文学だけでもない立場、言い換えれば、実際には稀有な人物であるにもかかわらず原則として「どこにでもいる人」、ポーランの述べるような王、つまりは実体のない王様の位置に立つ人なのだ。「フェネオンは、専門家になってしまうことを絶えず拒絶している。彼はいつも人間に戻るのだ」<sup>(14)</sup>とポーランは主張し、評価するのだった。

実際のところ、フェネオンが爆弾テロの実行犯として裁判にかけられたときの供述と、不道徳的とみなされたサドの著作を出版した廉でジャン＝ジャック・ポーヴェールが裁判にかけられたときに証人としてポーランが行なった供述とが、人を食ったような態度を見せるという点で見事なまでに類似しているのである。以下が、ポーランの伝えるフェネオンと裁判官との会話。

裁判官「あなたの住居の管理人が、あなたの家にはいかがわしい人々が入りしつていたと証言しています。」

フェネオン「私のところに来るのはほとんどが作家か画家なのです。」

---

(11) Félix Fénéon, *Oeuvres plus que complètes*, Droz, 1970, p. 915.

(12) Joan U. Halperin, *Félix Fénéon*, trad. de l'anglais par Dominique Aury, Gallimard, 1991, p. 269.

(13) Jean Paulhan, *F.F. ou le critique*, op. cit., p. 62.

(14) Jean Paulhan, *ibid.*, p. 89.

裁判官「アナキストであるマタが、パリに来たときあなたの家から出てきたのですが。」  
フェネオン「きっと金を無心してきたのでしょう。」

……

裁判官「あなたの書齋から雷管が見つかったのですが、もともとどこにあったものですか。」  
フェネオン「父が道端から拾ってきたのです。」

裁判官「ではどうして雷管が道に落ちているというのですか。」

フェネオン「取調官は、私がなぜ雷管を警察に持っていく代わりに窓から投げ捨てなかったのかと尋ねましたよ。だとすれば、道に雷管が落ちていることもありうるでしょう。」

裁判官「あなたの父親はその雷管を保持しているべきではなかった。国立銀行に勤めていたのですし、彼には雷管など何の役にも立たなかったはずなのですから。」

フェネオン「たしかに、父がその雷管を使って何かをしようとしたとは思いません。戦争省に勤めている息子である私も同断ですね。」<sup>(15)</sup>

かたやポーランは、サド裁判において次のような問答を行なう。

裁判官「サディズムと呼ばれているものの構成要素である洗練された残酷さは、すべてどうしても不可欠なだと、あなたは考えているのですか。それが当たり前のことであり、不適切な箇所を削除しなくても危険はない、と考えているのでしょうか。」

ポーラン「一昨日、私は聖書を読み直しました。これは恐ろしい本ですよ。聖書によれば、村人たちは、異邦人たちが誰なのかを「確かめよう」として、ロトが彼らを招き入れた家の周りを全員で取り囲んでしまうのですからね。」

裁判官「もっとはっきり質問することにしましょう。もしあなたに幼い娘がいるとして、あなたは聖書よりもサドを読ませようと思うのですか。」

ポーラン「そんなことは一言も言っていない。娘に聖書を与えるときは、つねに注意を払ったうえでそうするだろう、と言っているのです。」<sup>(16)</sup>

---

(15) Jean Paulhan, *ibid.*, pp. 41-42.

(16) Jean Paulhan, *ibid.*, pp. 95-96.



フェネオンから多大な影響、すなわち当時の前衛芸術だったキュビズムへの関心や文学作品や作家の選択眼における影響、端的にいえば、多面的な活動や関心という影響を受けたとはいえ、ポーランはアナキストだったわけではない。政治的にはポーランは、どのような思想や姿勢であれどちらかに偏ることを避ける人だった<sup>(17)</sup>。フェネオンからポーランが学び取るのは、議論をはぐらかすかのように振る舞うことによって、善悪をはじめとする種々の事柄にかんする議論において、人々が無意識に想定しているような前提や知らぬ間に陥っている錯覚を、まづもって疑ってかかる姿勢である。その際に依拠されるのが、「何者でもある」と同時に「何者でもなく」、専門家でありながらまづもって人間であるという、空虚な立場なのだ。そしてこの視点こそ、恐怖 (Terreur) と共存する文学、さらには、恐怖を内包しつつそれに対抗する文学との考えをポーランに可能ならしめたのである<sup>(18)</sup>。

## 2. シャルル・モーラスとジョルジュ・ソレル

ところで、ポーランが単行本としての『タルブの花』を刊行しようとしていた頃、モーラスは、まもなくユダヤ人や対独レジスタンスに対して恐怖政治めいた政体となるヴィシー政権下でフランスの護持を唱えていた。1940年、第一次大戦の英雄ベタン元帥が自由地帯の国家元首になった後の1941年、モーラスは、ベタンに実際に政治的手腕があると認めて、ベタンへの全権委任を「神の一撃」だったと叫ぶ。脆弱ながらも70年近く存続した第三共和政がドイツに対する敗北という形で倒れた後、「自由・博愛・平等」に代えて「労働・家族・祖国」を旗印とする「国民革命」を掲げ、「フランス人のためのフランス」を目指して「フランスの再建」を唱えたヴィシー政権は、第三共和政を目の敵にしてきたモーラスとしては、自身の理想とした王政主義の具現にはほど遠いものの、「ただフランスのみ」が重要であるとの従来の主張からすれば、まさに外からもたらされた偶然のように幸運なものであった。

モーラスの思想は、数で物事が決められる民主主義、およびそれを支える代議制が人間の「自然」に反していると見なすものである。そして彼は、民主主義に對置されるべき自らの政治論の核心を「自然なる政治」と呼ぶ。それは、人間の成長と社会や国家の発展とを重ね合わせて考察する論理である。子供は、自分が生まれる前からすでに存在している社会と家族のなかに生まれてくる。子供は自分の

(17) この点については、拙論「どこにでもいる人の常套句——ジャン・ポーランの民主主義」『言語態』第3号、2002年を参照。

(18) ポーランのフェネオン論はフェネオンを過大評価するものであり、偏った解釈でもある、という指摘はたびたびなされている。しかし本論では、フェネオン自身の思想の広がりや、彼がフランス文学史上に占める位置についてではなく、フェネオンからポーランが受けた影響について考えてみたい。また、フェ

ネオンもポーランも、人を食ったような言葉を吐きつつも、立場は異なるものの、かなり危険な状況を潜り抜けてきている点で共通している。フェネオンは爆弾テロの被告として裁判にかけられたが、ポーランもまた、本論でのサド裁判においてではないが、第二次大戦中にはレジスタンス活動ゆえに何度か捕えられ（ジュアンドーの妻がポーランを密告したこともあった！）ドリュエ・ラ・ロシェルたちの尽力で釈放され、パリ解放直後にはレジスタンスでありな

生まれいずる環境を選ぶわけではないが、もしそうした環境から引き離されてしまうならば、当然ながら生きられない、というわけだ。ホッソスの考える自然状態とはかけ離れたその出発点について、モーラスは次のように記している。

好き嫌いにかかわらず、望んだわけでも選ばれたわけでもなく、選べるわけでもないこの自然の土地を受け入れ、その偶然の土地の作法を習得しなければならない。さもなければ、思想の死であり行為の自殺にほかならない盲目的なシステムを甘んじて受け入れるよりほか、致し方なくなってしまう<sup>(19)</sup>。

モーラスにとって、政治とは、それが自由で普遍的な選挙の埒外に打ち立てられるべきものであるがゆえに、歴史の流れを断ち切らんとする革命という人為的手段で確立された体制以前にすでに存在していた、伝統や系譜をそのまま受け継いでいる「自然」な姿こそ、本来の姿なのであり、フランス共和国はあるべきフランスの姿からはほど遠く、ただ単に「現実の国」として存在しているにすぎない。

だが、実際のモーラスの王政主義は、政治的マキャヴェリズムの塊とでも言うべきものである。というのも、それは、中央集権制を自然状態に対立する人工物とみなし、もっぱら王位の連続性のみを重視するものだからだ。彼は、「人間としての王は墮落しうるが、王位としての王は、墮落しようがないという直接的かつ精神的利点を有している」<sup>(20)</sup>と述べる。つまるところ、彼にとって、王は、王家を途絶えさせないものであれば、どんな人物であってもよいのである。有機体としての家族や地方や国家の組織を目指す「自然なる政治」がその実、出発点においてまったく偶然に支配されているという点で、モーラスが、パタン元帥の姿に、ドイツに敗北したフランスの救世主を認めたとしても不思議ではないし、モーラスの王政主義は、王が実は誰でもよいとする点で、無償なものにも見えかねない。

そして実際、ゼーフ・ステルネルが、「完全無比なナショナリズムにとって、民主主義は反国民的であり、革命的サンディカリズムにとって、民主主義は反社会的である。どちらにとっても、民主主義の正当性など何ものでもなく、民主主義は自然に反するもので悪の具現なのである」<sup>(21)</sup>と

---

が対独協力者の粛清を咎めたがゆえにレジスタンス系の作家たちから非難轟々となるなど、たびたび危険で困難な立場に身を置いている。

(19) Charles Maurras, *Mes idées politiques*, rééd.

L'âge d'homme, 2002, pp. 81-82.

(20) Charles Maurras, *ibid.*, p. 305.

(21) Zeev Sternhell, *Ni droite ni gauche -- l'idéologie fasciste en France*, nouvelle édition revue et augmentée, Complexe, 2000, p. 178.

指摘しているように、モーラスの唱える「完全無比なナショナリズム」——それは、人が生まれ育つ地域に根差しながらも、危急の際には王を中心としてフランスという一国を守ることを目指すがゆえに、抽象的な数の支配する中央集権の共和政のナショナリズムとは異なり、人間の幸福を対外的にも国内的にも全的に保証するという点で完全なるものと主張される思想——は、革命的サンディカリズムと遠からぬ関係があった。モーラスは、反民主主義および反議会主義という目的を明確に掲げて、ジョルジュ・ソレルに接近する。ユーゲン・ウェーバーが言うように、「アナキスト、サンディカリスト、そして完全無比なナショナリストは、少なくとも一時期は、互いに自分が国家の敵であると考え、多かれ少なかれ反民主主義の戦いにおいて共闘していたのである」<sup>(22)</sup>。

ソレルもまた、フェネオンに負けず劣らず多面的な人物である。彼は、技術者であり、経済学者でありモラリスト、熱烈な反知性主義者であり、革命的サンディカリズムの思想家として、労働組合によるゼネラル・ストライキの効力を唱え、1908年、『暴力論』を発表する。そこで彼は、経済を第一に掲げ、強烈な反議会主義、反民主主義を唱えている。その際、彼は、フォルスに対抗するヴィオランスを称揚する。

私は、いかなる曖昧さをもひきおこさない用語をとると大きな利益がある、そしてヴィオランスということばは第二の意味〔叛逆的行為〕にとっておくべきであろうという意見である。われわれは、だからフォルスは少数者によって支配されるある社会秩序の組織をおしつけることを目的とするものであり、他方、ヴィオランスはこの秩序の破壊を目指すものであると、いうであろう。ブルジョワジーは近世の初頭以来、フォルスを使ってきた、他方、プロレタリアートは、いまや彼らブルジョワジーと国家とに対して、ヴィオランスによって反撃しつづけるのだ<sup>(23)</sup>。

ソレルはこのように、合法的な権力（フォルス）と法を破る暴力（ヴィオランス）とを区別しながら、ブルジョワ民主主義に対する革命的暴力を肯定する。世紀転換期の彼ら一部の革命思想家たちもまた、ブルジョワ民主主義への激しい敵対という点では人後に落ちなかった。フランスにおけるファシズムの形成を跡付けている深澤民司は、「アクション・フランセーズによってブルジョワ

---

(22) Eugen Weber, *L'action française*, trad. de l'anglais par Michel Chrestien, Fayard, coll. Pluriel, 1985, p. 104.

(23) ジョルジュ・ソレル『暴力論』木下半治訳、岩波文庫、下巻、p. 44.

ギーが平和主義的で議会主義的なプロレタリアートに戦いを挑むことを、ソレルは期待したのである」と指摘し<sup>(24)</sup>、また、フランス・ファシズムの遠因を右派や右翼思想だけではなく、それらと左翼思想とのつながりのなかに探っているステルネルは、「[...] 民主主義に対する反抗は、[ドレフュス事件以後] 三つの流れで発展する。黄色組合、アクション・フランセーズ、そして反抗的な極左である」<sup>(25)</sup>とまとめている。このように、反議会主義を唱えることで既成左翼を乗り越えようとする政治運動にも、アクション・フランセーズに接近する要素があったわけである。このような状況下で、「ソレルは、モーラスの革命戦略にとって欠かすことのできないピースの一つだった」<sup>(26)</sup>。そしてモーラスだけではなく、ティエリ・モーニエをはじめとする彼の弟子たちが、ソレルの暴力論のもつ、社会を転覆させるヴィオランスという思想から、大きな影響を受けて、保守革命論を展開していくことになる。

もっとも、モーラスとソレルとのこの共闘には、フェネオンとポーランとの師弟関係にも似た関係に見られるような影響関係は認められない。ここで注目したいのは、一時期に留まったにせよ、そしてどのような形であるにせよ、アナキズムを標榜していたフェネオンに共鳴したポーランと、革命的サンディカリズムを掲げていたソレルに共鳴することのあったモーラスとが——しかもポーランもモーラスも度合いこそ異なるれどもに代表制を批判していた——、1940年代になぜあれほどまでに対照的な立場を取るに至ったのか、という点である。

ソレルが権力に対置した暴力は、プロレタリアートによるゼネストの形を取って顕現するが、ソレルはそれを「神話」と呼ぶ。

[...] われわれは、総罷業というものが、確かに、私のすでにいったもの——すなわち社会主義がすっかりその中に集約されるころの神話、換言すれば社会主義によって近代社会に対して行なわれる戦争の種々な発現に照応するあらゆる感情を本能的に喚起し得る形象（イマージュ）の組織化であることを知る<sup>(27)</sup>。

この「神話」が個人の意志の表現だとするならば、現在の精神に現実の姿を与えることが問題となるだろう。そして確かに、ソレルは『暴力論』を次のように結んでいた。

---

(24) 深澤民司『フランスにおけるファシズムの形成』 Po, 2000, p. 32.

岩波書店、1999年、p. 214.

(27) ジョルジュ・ソレル、前掲書、上巻、p. 204.

(25) Zeev Sternhell, *op. cit.*, p. 163. なお、ここでの「黄色組合」とは、ピエール・ビエトリーを中心とする集まりだが、その実態については、紅色組合に敵対する御用組合的集団とする立場や、ブランキ主義者たちの一部をも含む集団とする立場など、諸説ある。

(26) Bruno Goyet, *Charles Maurras*, Presse de Science

以上の説明は、総罷業の観念が、プロレタリア暴力によって喚起される諸感情によって絶えず若返らされて、全く史詩的な精神状態を生みだし、そして、それと同時に、自由に運営され、かつ著しく進歩的である職場を実現することを得させるような諸条件に向って、魂のあらゆる力を向けさせるものであることを、示した。われわれはこうして総罷業の諸感情と、生産における不断の進歩を促がすのに必要な諸感情との間には、極めて大きな近似関係があることを認めたのだ<sup>(28)</sup>。

ソレルはこうして、革命運動によって高揚した変革的「精神状態」が生み出されることを主張しているが、ゼネストというヴィオランスの出現によって、労働者たちの精神、ひいては社会主義運動そのものがつねに崇高なものとして再生することになる。

なるほど、モーラスは、ソレルと一時期歩調を合わせるも、結果的に、この共闘は一時的なものに留まる。というのも、いくら反議会主義の姿勢が共有され、双方ともにブルジョワ民主主義を転覆させるべく下層大衆を運動に取り込んでいたとはいえ、革命のヴィジョンが互いに遠く隔たっていたからである。つまり、社会主義者のソレルの目には王政主義はあまりに時代錯誤に映った一方、モーラスにとっては社会主義が保守系カトリック勢力に及ぼす影響が危惧されたのである。しかしながら、ポーランが、フェネオンのアナキズムから影響を受けつつ王位を空無化させ、どこにでもいる人を称揚することで代表制とは異なる形での民主制を唱えるかに見えたのに対して、ゼネストの神話を主張するソレルに一時期であれ接近したモーラス（およびその弟子たち）は、ベタンのなかに、救国というまさしく神話的な力を認めたのである。

フランスの敗北を前にして、モーラスは、文学をも政治的道具として用いるその政治的マキャヴェリズムをもって、「フランスのみ」という神話を掲げることになる。それはけっして無償のもでも可能態に留め置くべきものでもなく、実際に具現すべき課題としてつねに提示される。排外ナショナリズムの立場からドイツは敵国であると主張していたモーラスではあるが、彼にとって、ドイツに対する敗北は、フランスを脆弱な国に貶めた元凶が代表制にあることの証明にほかならなかった。実際、厭戦の雰囲気満たされていた当時のフランス人にとって、第一次大戦中のヴェルダンの戦

---

(28) ジョルジュ・ソレル、同書、下巻、p. 181.

いで勝利を取めた齢80を超すベタン元帥は、まさしく神話的人物なのだった。そして、1940年夏以降、対独協力的な新聞や雑誌がパリに拠点を残すなかで、モーラスは自由地帯に移って「アクション・フランセーズ」の刊行を続け、「国家存亡の危機に際して、元帥の行動と国の世論の間に多少の齟齬も生じさせないよう全力で務めること」を目標に掲げたのである<sup>(29)</sup>。ヴィシー政府は王制を布いたわけではないが、1940年7月には外国人を父にもつ人を公職追放するなど、「フランスをフランス人の手に」と唱え続けてきたアクション・フランセーズの思想の一部に合致する政策を取るようになったし、ベタンが教権を支持したことは殊更モーラスの考えに共鳴するものであった。

モーラスをモーリス・バレスやシャルル・ベギーと並べつつ、ドレフュス事件期のナショナリスト作家を比較分析した有田英也が、「[...]バレスにしても、やはり評論では今ここにないフランスを見据えて説教家のように同国人に訴えた。プロヴァンスと異教古代を精神の郷土としてモーラスも、「国王」をroyと古風に綴って、あたかも郷愁のごとくに王党主義を表した。この時代錯誤を『われらの青春』で嘲笑したベギーもまた、ドレフュス事件の神秘を唱えて読者を突き放してしまった。[...]ナショナリスト作家はナシオンに代わって語る」<sup>(30)</sup>と指摘するように、彼らは、それぞれの相連を超えて、おしなべて国民再生の代弁者たらんとし、本来は誰のものでもありながら誰も埋めることのできるはずのない空虚である「フランス」という国に、何らかの実体を与えようとした。そしてモーラスは、第三共和政が崩壊したとき、来るべき恐怖政治に対する抵抗どころか、「フランスをフランス人の手に」取り戻させるべく、すすんでその実現に貢献することになる。ベタンが神慮によるかのごとく偶然に国家元首となったにしても、モーラスは、その偶然性そのものに注意するのではなく、ベタンが国家元首の座に就くことによって可能となるフランスの再生をこそ追い求めた。言い換えれば、王様を共通のものとしてその実体を空無化したポーランとは異なり、モーラスは、神話の具現として王様を実体化してしまったのである。その結果、モーラスは、神話に溺れることになった。つまり彼は、フランスの「敵」を探すのに躍起になるあまり、ソ連は言うに及ばず、しまいは米英軍の勝利もユダヤ人やフリー・メーソンの勝利を意味することになると考え、進んでドイツに協力するようになり、1942年11月以降にフランス全土が占領されている状況下で、フランスのために戦おうとするレジスタンスたちを、まさにフランスの大義の下に弾圧すべきだと唱えるに至ったのである。

---

(29) Charles Maurras, « La politique », *L'action française*, 22 mai 1941. ミシェル・ヴィノック『知識人の世紀』塚原史ほか訳、紀伊国屋書店、2007年、p. 397. に引用。

(30) 有田英也『ふたつのナショナリズム』みすず書房、2000年、pp. 380-381.

### 3. 結びに

ポーランは、フェネオンやグラールヴそしてモーラスを読みながら、その王政主義の中から偶然性の主張を拾い上げ、どこにでもいる人、すなわちすべての人に爵位を授けること、言うなれば王位が拡散することを考えた。そして、善悪の価値基準が一瞬にして入れ替わるナチ占領時代のフランス、およびパリ解放直後のフランス——ヴィシー政権以前の反独姿勢はヴィシー政権が樹立されるや非友好的な立場となり、パリ解放直後には裏切り者と見なされたわけだが——を、つねに変わらぬ中庸と面従腹背の姿勢で生き延びた。モーラスは、王の正当性の根幹に偶然を据えるものの、あくまでも、その帰結となるべき国家の具現を追求し、フランスの国体が堅持されるためには手段を選ばなかった。そして彼は、フランスの敗北という現実を前にして、ペタンに全権が委任された政権を僥倖としながら、「国家に対する反逆 [1945年のモーラス裁判で問われた彼の罪状]」にはしることさえためらわなかった。

あくまでも現実に働きかけることを旨とし、政治思想に美学を奉仕させる姿勢と、徹頭徹尾、無償たらんとする中庸としての思想。ポーランとモーラスとのこうした差異の一端は、アナキストでありながら役人、美術批評家かつ文筆家といういくつもの顔をもちながらも専門家でない人間であり続けたフェネオンと、ゼネストという一つの神話を打ち立てようとしたソレルという、二人の対照的な革命的思想家の姿勢に由来しているかに思われる。

本論は、日本学術振興会による人文・社会科学振興プロジェクト研究事業 V-3 のコア研究「文学・芸術の社会的統合機能の研究 (LAC)」主催の第 8 回国際シンポジウム「文学とテロル」での発表が基になっている。

本論の執筆に際しては、科学研究費補助金「現代の極限体験 (検閲や収容所) における文学の性格と意義」(課題番号 19720075) の助成を受けている。

